加害者の年齢が謝罪行動に及ぼす影響についての探索的検討

○八木彩乃¹ 榊美知子^{1,2}

(高知工科大学総合研究所¹ レディング大学²)

Key words: 謝罪, 加齢, 時間的展望

目 的

社会情動的選択性理論では、高齢者は情動的な充足を重視するために、今現在の社会的パートナーとの関係を大事にすることが指摘されている (Carstensen, 1992)。このことを踏まえると、高齢者は若者に比べて、対人間での葛藤状況でもその解決につながるような態度を取りやすいことが考えられる。この予測について Cheng and Yim (2008) は、葛藤状況における被害者側に着目し、高齢者は若者よりも相手を許しやすいこと、さらに時間的展望を操作された参加者は若者・高齢者のどちらの世代でも、限られた時間の視点を持つよう操作された条件で相手に対する許しの程度が高くなることを、場面想定法を用いた実験により明らかにした。この結果は、残された時間の知覚がモチベーションの変化を引き起こすとする社会情動的選択性理論の議論と一致している。

以上から、本研究では対人間葛藤状況の解決における世代間の違いについて、加害者側に着目し、高齢者は若者よりも今ある関係を維持する動機付けが強いため、謝罪をより熱心に行うという仮説を検証する(仮説①)。また、時間的展望の操作を行い、限られた時間の視点を持つよう操作された参加者はそうではない参加者よりも謝罪を熱心に行うか否かを明らかにする(仮説②)。

方 法

■参加者： 高知工科大学の学生 48 名（男性 33 名、女性 15 名； $M_{\text{age}} = 19.83 \pm 1.36$ ）と、シルバー人材センターを通して応募のあった高齢者 48 名（男性 27 名、女性 21 名； $M_{\text{age}} = 72.06 \pm 4.74$ ）が実験に参加した。

■条件： 2（世代：若者・高齢者）×2（時間的展望の操作：寿命半年の Short 条件・寿命 120 歳までの Long 条件）の参加者間要因配置であった。

■手続き： 実験は時間的展望の操作及び場面想定法を用いて行われた。具体的には、まず参加者の時間的展望の操作として、自分の余命があと半年である（Short 条件）、あるいは自分には 120 歳までの人生がある（Long 条件）と想像させ、その状況であれば貯金はどうするか、日々どういった目標を立てて過ごすか等をインタビューした (Barber et al., 2016)。次に、仲の良い特定の同性の友人を思い浮かべてもらった後、その想定した友人に対して非意図的に迷惑をかけてしまうシナリオを提示し、その出来事がもし実際に起こったとしたら罪悪感を体験すると思うか（1 全く感じない - 5 強く感じる）、言葉での謝罪をするか・お詫びのプレゼントやご飯を奢るといった金銭のかかる謝罪をするか（謝罪への意思：1 絶対にそうしない - 4 絶対にそうする）、もし謝らなくても相手は自分を許してくれると思うか（無条件の許しへの期待：1 全くそう思わない - 5 とてもそう思う）を回答してもらった。なお、過失のシナリオは Cheng and Yim (2008) を参考に、待ち合わせの約束を忘れてしまう待ち合わせシナリオ、友人の私物を壊してしまう破損シナリオ、友人の秘密を他人に話してしまう暴露シナリオ、友人から手助けを要請されたものの後回しにしてしまう手助けシナリオの 4 種類を用いた。最後に、10 cm の横棒が書かれた紙を提示し、端から端までが自分の人生の長さを表しているとする場合に今が位置すると思う箇所に縦線を書き込んでもらった。その縦線から線分

の終点までの距離を計測し、自身の人生に対する残り時間の知覚の長さとして、時間的展望の操作チェックに用いた。

結 果 ・ 考 察

高齢者（Short 条件 $M = 2.33\text{cm}$ vs. Long 条件 $M = 2.46\text{cm}$; $t(46) = 0.30$, $p = 0.381$ ）、若者（Short 条件 $M = 7.21\text{cm}$ vs. Long 条件 $M = 7.89\text{cm}$; $t(46) = 1.27$, $p = 0.106$ ）共に、知覚している残り時間の長さについて有意な差は見られなかった。ただし、操作チェックの実施が、場面想定法の課題をこなした後であったために操作の影響が低減してしまった可能性が考えられる。

次に、謝罪への意思（図 1）と無条件の許しへの期待について、世代×時間的展望の条件×過失シナリオの分散分析を行なったところ、どちらにおいても、世代の主効果が有意であり ($F(1, 367) = 4.42$, 12.31 , $ps = .036$, $.001$)、高齢者は若者よりも謝罪への意思が低く、無条件の許しへの期待が高いことが明らかになった。また、シナリオによっては高齢者は若者より罪悪感の経験の程度が低いことも認められ ($F(3, 367) = 2.67$, $p = .047$)、全体として仮説①とは逆の結果となった。さらに世代×時間的展望の交互作用も有意であり ($F(1, 367) = 3.87$, $p = .050$)、高齢者の Long 条件の参加者は他の条件の参加者に比べて謝罪への意思が低い傾向にあることが示された一方で ($F(1, 367) = 2.75$, $p = .098$)、若者では操作の影響が見られなかったことから、時間的展望の効果は高齢者のみの限定的なものであった。

以上から、予測に反し、加害者側では高齢者はむしろ若者よりも葛藤状況の解決に積極的ではないことが示された。この理由として、高齢者の友人同士では現関係の維持が双方にとって重要であるために、加害者であっても無条件への許しの期待が高くなり、謝罪という自責を認める点でネガティブな経験を避けている可能性が考えられる。

図1 各条件での謝罪への意思の平均値。

引用文献：Carstensen, L. L. (1992). Motivation for social contact across the life span: a theory of socioemotional selectivity. *Nebraska Symposium on Motivation*, 40, 209-254. ◆ Cheng, S. T., & Yim, Y. K. (2008). Age differences in forgiveness: the role of future time perspective. *Psychology and Aging*, 23(3), 676-680. ◆ Barber, S. J., Oritz, P. C., Martins, B., Sakaki, M., & Mather, M. (2016). Thinking about a limited future enhances the positivity of younger and older adults' recall: Support for socioemotional selectivity theory. *Memory and Cognition*, 44(6), 869-882. (Ayano YAGI, Michiko SAKAKI)